門へ遠13
箱 1885
巻 二

宮内省圖書寮

競奇遺聞　巻の二

禁犯戒邪淫僧尼

嵯峨天皇御五位のころ犯戒邪淫の僧尼あつを不法の事ども叡聞ふ達しられハ弘仁三年乃至有司ハ語ひつゝ項日俗輩ハ男女事を議聽ふ託け撰りに僧尼の寺院ふ入り説法説ゝ其ち屢侵犯の事多ハ外ハ勝園ふ仰ゝ内ハ却て淨業を汚を自今以後男子尼寺ふ入女人僧房ハ入ゝ次ゝ堅制をれゝ然ふ京都下の所ふ

寺子淫奔私孫の僧になりし事を遍く話り伝へくる
そ始末を聞ふ越前の国ふ紀山源十郎といふ者あり
先祖より素姓正しく小知をも領せず者なりしが
世〳〵養ひ源十郎父母より早く離れ家内貧困
貧困ふなりしゆへ幼れいまゝ書ふを持されハ止まを
幸ふ高師ふ入書を学び諸方へもとのるべしと
只さへ人迫江ふさしかを湖水の風景ふさろを慰免
海ふ出て傍て道を行志賀郷ふ漕く迫く須日
已ふ黄昏ふ及び往来の人も稀ふなりなるかる所ふ

山よせの林のかゝり盗賊四五人出来て何の舎釈もなく
前後より源十郎を捕へ理ふ及ぶを剥れ懐中ふ
貯へ金をも強び奪ひ丸裸ふなるまゝ散〳〵
手撫してにげくもるく逃去りなる源十郎辛き命を
拾ひ出れも捧へ金銀をも奪ひ取ふ縛へき
服も残らず衣をも剥方残らず犢鼻褌のみふ菖蒲を巻て
走去のゝまて歩行とはる民家ふ立入盗賊て
逢て次第を語り行こそ一部を呼せて活れしと
涙を流てやはる主の翁ふ寄て其仏〳〵ぞる

こゝろの赤を洗ひ免れ難きをうけ相ひ親後の事ふ
達れいの多人の噂ふ世間北の山合ふ盜人隱れ接
く旅人を追剥とるゝ兼りしが供ハうれうぶ不男
爲一仙安うれ富ゝ〻さすべしとしまづ服を与へて
飯を喰ゝ免ふ侍ひ主本國姓名をとゝ
源十良嬢〻く山屋恩の經系を往合ふて比べとし別
本國姓名どもいりのまに山とひ大星ひる事しも
姓名詳ふ物ゞうせしうバ翁并順ひれハ見給ふ通り
漁翁乃身ハれバ使ふるゝきカを形〻去形ゝサの

疑人を惠ひ〻〻ふく高師ふ上りいふもして恩惠
ひるゝ方ふ立まりて富ゝを通げ給ふべし基を示ハ
義論吾太ゝて武士の教ふ〻ハ〻ふ形ゝが子細有て
今ハ汐の久佐音ゝしかくひるゝ所漁父と形ゝぬ
値遇の縁ひるバ又重て相逢べしと物語給ふ〻うバ
一間ふ休ませ〻ぬ羽ゝ形旅用ハ給ひ汐の魚を煮
飯を炊ゝ酒を強ゝめて別れる涙十帰謝し
かくまりて四方志つの附ふ報〻ゝさん實ふ再生の
父ゝゝゝて存ひ人重ゝ山毒謝ゝるべしと式礼して

京都ふかせり白川辺ゝおひて親族の者なりしを頼り
[illegible]の名をゝびふ案内をもて賊ふをとり幸ともを清り
ゝる計ゝ貧家なれば新しかり力形ゝ添ナ帛書ゝり
破産の身なれ藍褸者なる衣服を多ふ奉仕ゝ
方便を形ゝ日来の大恩ハ忘ゝ今ハ一飯を續
がゝ兎やをん角やと日を送る所ふなる人教てをひ
ゝる八尚付寺院の盤冒なれば何方の寺へ形りも立ての
営社藝を中立ゝれハ宜敷ゝ思ゝ
源ナ良教ふ母を洛外の一ツの大寺ふ到りぬ方丈の口ふ

立入り通ゝ平雨形ゝ幸ふゝとも果ハ流浪の者なて
いり和尚乃慈悲をゝく掃除水乃為院内ふ掃ハれ
厚く勤仕ゝ子ゝ高沙欲ゝれハ清きゝ僧を人
出ゝ原ナ帛ゝ賊ゝ人ふを熟ゝ考て其方
いゝ形る伎藝ふも有や原ナ帛芸ゝ
自然ふ和書幸を学ゝ筆法を学ふ似ゝ
又素ゝ父常ふ山水を畫乃癖ゝ有て彩色又花鳥
水石大方ふを写ゝ幻畫る形乃書絵を出して
ゝをりに清玄寺眺ゝ筆法を恥ゝ幸ふ畫も亦

風流なりける中、慶されハ一人を養ひつゝ幸安るべし
まづ愚僧が房ふけるべしとて伴ひ帰るそれなりける中を
めぐりて用を無べし大ふ便をはるる寺僧も驚きるに
随ひ其標致凡俗をはるかに極ハいよ〳〵憐を加へる添ナ帰
已ふ心落着かゝるを幸を語りられば方勤学
乃志ひらば洛陽の鴻儒嵩寺ふ来る人多しふ
独〳〵学べしと熟懇ふ取持る添ナ帰も法師ひ
師ひのごとくはたゝ寺ふ入る幸已ふ二年修学業も
稍上達洛中の貴族ふも朋友多く成りて出世の

あるるを出ふ日清吉の房を出く烏窓と
なる僧の院ふ移りるに烏窓を作り山僧ふ
ちくめしふ居眠居るを添ナ良院内を徘徊る所ガ
出ふ双六の吉算人ふれば遊客やうして法師
ふれを聞き所ふ楼梯ひる何れ男ふるる直ふ
楼ふ登ふれば楼上ふ二人の美女お射して双六を
しるいづれも紅顔羽華貌乃美色ふ成り添ナ帰をうて
夢ふ怪ふる気色ふ成く此楼ハ外人の来ぬる所ふ非ず
誰人ふしてうゆゑやこまるける中に年久く宿

松堂誠写

せるこの時分今日烏室他行ふりて双古の家ばかりそ
圖をもちに来りて唐突乃濯紙敲〳〵語りてはは
婦人聲を低くく君ハいまゝ世の様子を知玉りぬ物
るべしちゝハ寺僧密通乃樓ふく若組ひても
ちゝに来りて他人ひれいるゝ次敷害せるゝ人の
知るゝらにまく立帰り語へとゝ次源千良軍く
きあしを出ぬ出立葉乃来いゝ不審ちを抜れ
まびかるゝハいう時るゝ人ゝし濟り語ふそ一人の婦人ゝ
毒を江州志賀里義潟葉ゞ女松枝ゝ殺ゝれ時り

幼より京ゝ来りを橋宮の家ゝ仕へ色ゝ十七ゝ時ゝ奴義
當れ淫俗ふ嫉ゝ大葉ゝ時ゝ又是乃ハ京地
ゝし論を南ゝ人ゝ妻ゝを連ゝ来ゝ家を用い遊業を
ゝ語ゝ是ゝ時ゝ再び戸外ゝ出ゝ
事を許ゝ時ゝ一人の男子悔ゝ
来りゝ僧徒ゝ化れ沙法を時ゝ刺殺ゝ後ゝ山ゝ
埋ゝ君ゝ者ゝ兄ゝ乃ハ不義ゝ死ゝ時ゝ早疾去ゝ
いゝ源十郎樣ゝ事ゝ伝ゝ無ゝ縁ゝ郷ゝ
郡ゝ出ゝ付遠平ゝ出て遥縁ゝ死ゝ及ゝ

学文義源氏乃情あく幸紀命を助りぬと受て次
第〳〵に付を移し〳〵るかゝる所小為室院小傳り
構小登りて添十良を呼て寺知ひ
者ゝ多ありしかゝ者を知ひく為ぐや添十郎
傳る言ゝ上ゝぐいれ今自師を訪ひ〳〵に宣房好り
勝く慰新に遥小双六乃事を算く定て来客
後院ゝ行かと尋ね来り偶然ゝ仙蓬に
ゝ音ぎりき師兄第四風流の事弘平生陽
野を集小人ゝ〳〵ゝ源〳〵語ゝて戯れくゝ

ゝれバ為室ゝ座を立く楼を下り従来の路れ
門を過〳〵覚輝ゝいつる友傳を呼事を由人〳〵を
添十郎ゝ左右れゝを捕く引立一ツ乃板室の門連り
ゝる傳小禁獄乃ゝ〳〵郎細索一筋剃刀一柄硯箱
一貼を與ゝく曰海山ゝ忍れ中行ゝ小行ゝく
風ひ孔を速ゝ〳〵結ゝぐハ我ゝ二人れを下〳〵吳今
縊殺ゝ為ゝいつは添十良大小驚ゝれハ元同事
乃去ゝ人のゝく家事小終く行乃場ゝ行ん当然の
科ハ免ゝ世ゝ〳〵ゝ乃ゝる為室ゝ云我傳家小密接ゝ頼

ひ唯剃髪の者ハ己が我輩密接を知るといへども
ふを辞して有髪乃者ハ釈父兄並朋友らとても
之を辞ス事一様ハ涙ぞ況や汝をや添十郎ハ云
たるハ我と又願くハ剃髪して僧となるべし覺蘇
ハ曰汝年来勤学切磋して舉業の至り今一時
乃雖を逃まんとハ剃髪せんとハ實の必ふあ
今日汝を害せんハ汝の自必亦輩を害らべし
碎々儀素が古をもりて脱んを求ても之ふ赦ざる
所なりと已ふ赦さんとハ添十郎今を早陳するに

辞るく涙を推くて云亦年来清吉師兄乃厚恩を
蒙を願くハ一面を得事を許さよ拝謝して死ふ
就へ一為空ハ曰汝清吉ふ憑く命を助ん事を
思ふも清直と又赦ふ事能ぶる道ハ無しかも
日ハの好ふ皆く重を以ふ清直と呼来
まり添十郎清吉ふ命ハて我師ハ恩顧ハ中
ふ事ハく手ハを送る一且ハ私事を尽されとも行ぞ
仰ふ漏ふ人や思ハ今死ハ及べり師父の
恩を報ハ玉ハと此を抛く

口説なる清さを流石交情乃添を釈ふ哀を催し
對る詞を聞くに不為空ら曰一人の命ハ小形り
寺内乃法を重しいふ〳〵ゝ山隠れふ入者ハ忽ち
骨肉を截断し行を私乃因へふゝ門を大仮の寺法
を破り清真行ぞ敢く汝を救んやと已ふ短力を
脇ふ押寄るを清さ泣ぶ〳〵と哀めて噫原十郎
汝が命極りぬ煩悩怨悔をゝ〳〵れ汝が屍をは
冥〳〵埋葬して法事を営み冥福を祈らん
然〳〵ハ来世ハ必冨貴と享く生るべし寺法金決

らを堅〳〵汝が比ふ陽事偏ふ前世の宿業と
されども交情乃絆縁を暫時乃死をゆるべしと三僧に
説く前乃索刀茅乃之ふを與へ板室乃門戸を厳く
鎖し今日死ぬハ来日死べしよも無を八ぶべ
し浩て三僧共ふ出きりぬ原十郎思ハぎる横難ふ遭く禁
籠ヤ是憤怒胸を焦し腸を腐ぬ免ても助るべき
命なく〳〵苦を受んゝり毒茅を呑く死をんや縊死
やせむ自殺やせんと千思万思文に変るこゝろ形
然乃花薮乃女枝又ふ迷く好ふく甚れを

憐みいとおもひて命を助まゐらせ
脱出てくびを術を細小書とて矢小巣を捕へ首ふ
くるを射縛ける板の透るゝ窓の間へ放ち入れり
添十郎ふしを怪み抜きさんに杉板ゲ西者へ佐八郎の
ゆまを探るぬと大ふ喜び常を潔乃ようり投けて
縛ゆるして柱を抱き天井乃板をカふ任せ推れば稍
ゆるぐ所ありし紙こぢ放し天井の上ふ入るゝ所さ
這ひ入れる杉板ゲ書中に如く簪間て
かしくゆのうゑる所ありしゆば紙刀をもつて土壁毀ち

屋を抜く逃ぶく這出て東ふ向ふ洛陽ゆゑり平生
乃學友ふ右乃始終を結ぶ事ありし国者ゑゆ歯を切り
憤を起すべしいふ所ふ添十郎ふちゑと添
評議を抜名新仕を志ゑ早速ふ諸へ行かくく
まず中ふ八四五日を経ては八三僧舎合て宮く
今ゑ死ゆるゆと且八義ゑ又八甚び三人お伴ひ僅て
戸を開きて出しを見て新ふ一信大ふ肝を
潰し勃然として色消失ふ室四壁鉄揺の如く
いふ術ゆて抜出ゑゑ昇て脱去

乃穴ひらき二人おゐて云ふ實に一大事なりと
道来ハ浴湯乃宮あり紀已多ゝ宮く迷ひ宮廳
ゐ御ゝ特ゐ常く仕ま中ゐ去事法人の紀西之
赤岩を漁ゐれハ奸惡の事ゝいふに涙をながく
陳謝ゐも卯石敵ゐ道べうゐ今ゐ宮命ゐ伐ゐ
道ゐをバ一之外事ゐ就て寺ゐ外僧ゐ出て
如ゐを云ふ何ゐも惡ゐ板室をも
毀べゝ赤くハ廻國僧乃之行脚せゝと
投身して面ゐも知ゐ人騒ひく寺ゐ

出奏ゐ偖宦司ゐを添ゐ命ゐ新歳重乃事ゐれ
急紀下吏数十人を百連寺内ゐ入く逐一ゐ穿鑿
究問ゐゐ非法無乳乃事ゐ知て諸僧破戒乃責
更ゐ脱ぎ捨ゝこの二女を弱ゐ文にゐ一僧を縛
ゐて拷問ゝれハ恩を五ゐて紀ゐ後山岩窟
乃ゐゐゐ捜ゝ出ゝ寺僧卒生乃
惡事を弱ゐ白狀を宮司大ゐ怒ゐ上へ
達ゝれハ腰斬車裂ゐも飽足ぬる所謀ゐ罪
を問ゝ後来の懲ゐ思ゐべゝく法方ゐ人を

酖りてか乃三僧を捕へ〻こきびしく鞭流し不日に
寺領を赤裸かして白晝に辱しめ偖三僧
乃諸財をも悉く添十帛に奪ひ集ひ
女子共いづれも新船に送り戻されける源十郎
漁翁乃父子に対らせて助命せれども
松枝を妻にと請共上方へ
松枝を伴ひ本国小浦に帰るがまづ志賀の里小三郎
義治が家小浦入けるに乃尾を結りれ八郎乃
夫婦大小驚きて莊乃涙に咽びされ偏に宿願れ

ものとなりて松枝を最早死せしめるとも思ひ小
再び急乎の婚礼式を取営み一家れ
悦びかざりの中添十帛小逗留して
小勢にて主の跡堅田乃浦を船にて過るに羅漢れ
かれ三僧数船の中にくりれで添十帛天れ與へて
悦び船端に立ちて大小呼ばりて合図を怒り
れば三人八洞の船庵小隠れて出合で頓て船に
水主小四郎者乃〻中渡し搦捕てそれ所乃
官吏へ渡し届出る悪僧共乃事明れを

清右衛門高師小路を過ぎ其時添十郎清真を
罵倒し呼び出せ汝と二僧一所に寝へ渡りたれども
つれし已前殺害に遇ひたる汝醤油乃介を殺し
恩を私乃介を殺しを見遁さんより早く逃げ出せ
逃げ隠るべしとて追放ちなる扶持添十郎ハ
本国越前小浜へ帰り富士見の茶小暮しなりと

競奇の遺聞　巻九二終